

## 資料 東京大学医科学研究所、中江 進

### ① テニユア・トラック事業への申請について（前職・志望動機）

#### 〔前職〕

Stanford Univでのpost doc後、横浜理研（RCAI、アレルギー遺伝子研究ユニット、斎藤博久ユニットリーダー）の研究員に着任。着任半年後、ユニットが解散に追い込まれ、国立成育医療センター研究所（免疫アレルギー研究部、斎藤博久部長）の基盤研流動研究員として異動。その後、現職。

#### 〔志望動機〕

Supervisorの下でいくら業績をあげたところで、自分のオリジナリティーとは評価されず、結局は、スポンサーであるSupervisorの業績にしかならない。自分のアイデアをもとに自身の研究のオリジナリティーを表現するためには、自分がsupervisorになる必要がある。テニユア・トラック事業の目的はそのための最良かつ最短な道と考え志望した。

学位取得後、自分のやりたい研究「IL-17を産生する新しいT細胞の同定」ができる研究室およびポジションが見つからなかったため（あってもその研究室にポジションがない）、給料を払ってくれるStanford Univの研究室にやむをえず留学した。留学当初は自由な発想で研究を行ってよいということであったが、その後、時のブッシュ政権が基礎研究費を大幅に削減したため、世界的に有名なアメリカ国内の実力者でも研究費がとれない、という時代になった。そのため、自由な研究（成果が上がるかどうか分からないリスクな研究）はできなくなり、毎日、研究費申請のためだけの上辺の研究をせざるをえなかった。

それに辟易してきたころ、2005年、和光の理研で、若手研究者を対象にした独立ポジションの公募があり、それに応募した。「IL-17を産生する新しいT細胞」というテーマで応募したが、見向きもされなかった。現在、その内容はアメリカの研究者によって証明され、最近の免疫学の「ブレーク・スルーなトピック」となった。結局、終わってみれば、その独立ポジションについたのは理研内部の研究者が多かったような???

自分のアイデアの研究ができるということで、帰国し、横浜理研の研究員になったが、半年もたたないうちに、所属していた研究室は解散。その後、国

立成育医療センター研究所で、創薬基盤研の事業の流動研究員に中途採用されたが、それまでの研究成果に対する評価が悪く、予算削減。人件費確保を最優先という事で、ここでも自分のアイデアの研究を展開する事はできなかった。自分のアイデアの研究を行えるような研究室を選ぶと、最終的には、どこへ行っても景気は悪く、結局なし得なかった。

テニユア・トラック事業は自分のアイデアを生かす／証明するためのチャンスと考えている。

## ② 現在の研究環境・研究室運営の状況について

必要な機器整備に対する予算が足りない。免疫学の基礎研究を行うためには、多色のカラーが扱えるフローサイトメトリーは必須ある。使用頻度が非常に高いので共通機器ではなく、個々の研究室で所有したい機器である。研究目的の都合にあう必要なスペックをもつものを導入するには3000万近くかかる。現在、若手プログラムの予算のほとんどを計上してフローサイトメトリーのリース契約を行っているが、その代わりに、試薬を購入する予算が当然なくなり、ポスドクを雇う人件費もなくなる。生物・医学系の基礎研究で使用する試薬は非常に高価である。遺伝子欠損マウスの維持費用も馬鹿にならない。マウスにアレルギーを誘導後、たかが、血中の抗体価を測定しようと思えば、イムノグロブリン（IgM, IgG1, IgG2a, IgG2b, IgG2c, IgG3, IgEおよびIgA）のELISA用抗体16種類を購入するだけで、文科省科研費「若手B」約180万円程度はあっという間に使い切る。そのため、研究費獲得のため、数多くの民間助成金の申請を行っている。とれるもの／とれないものもあるが、その申請書作成のために時間を割き、また、その報告書の提出のために、時間が取られる。善しも悪しも、これがPIの仕事といえれば納得もするが、PIであり、助教の雑用的仕事もし、ポスドクのように研究もし、一人3役をこなすという状況。幸い、請求書の処理などを行ってくれる事務員と、研究の補助を行ってくれる技術職員をつけていただいたので、一人5役を行わなくて済んでいる。

### ③ 現在の制度(若手研究者の自立的な研究環境整備促進プログラム)についての見解

(意義、改善要望等)

#### 意義

いくら素晴らしい研究テーマを頭の中に描いていても、それを実行／証明する場がなければ、それは無意味なものである。「さきがけ」を除けば、若手研究者にとって、自分のアイデアをもとに自身の研究のオリジナリティーを表現することができる数少ない場として意義のあるプログラムと認識している。リスクの高い研究であってもチャレンジできる場として重要である。

先の「最先端研究開発支援プログラム」での約30名の研究者への2700億円の配分に対し、石坂公成先生の談話として、“誰もが認める成果のある人を選べば、お金をだしたことは批判をされない。政治家や官僚にとっては安心かもしれないが、科学のためにはならない。過去の業績にお金を出すというのでは、研究資金ではなく『賞』だ”というのが印象深い。

この若手プログラムの最終選考のとき、おそらく、最終選考に残った若手研究者の中で、私がもっとも「過去の業績」が乏しかったのではないかと思う。過去の業績に対する評価ではなく、この「若手プログラム」という投資を行った場合、今後、その分野を引っ張っていくようなオリジナリティーの高い研究が展開できるかどうか、というポテンシャルを評価されたものと推測しており、本来の「若手プログラム」の趣旨にそった事業であり、今後も若手研究者の活躍する場としてもっとも重要なものと認識している。

#### 改善要望等

予算のアップ。

アメリカに留学したときに驚いたのは、試薬が日本の3分の1で購入できること。これは、言い換えれば、アメリカの基礎研究者は、日本の研究者と同じ予算で、3倍の研究ができることになる。その分、向こうではリスクな研究にもチャレンジしやすい。